

中国語を母国語とする在日留学生の文化受容態度に関する研究

－ 原因帰属とコーピング方略に焦点を当てて －

有 川 直 美

問題・目的

日本学生支援機構(2014)によると、我が国は、平成25年度、13万5519人もの留学生を受け入れており、留学生の適応に関する研究の必要性が高まっている。

留学生の文化受容態度 留学生の適応に影響を与える要因は数多く、その中でも田中(1998)は、留学生の適応問題の特徴の一つとして、「異文化性の問題」を挙げている。留学生は、第1文化をほとんど獲得しながらも第2文化を獲得するという二重の課題を持った学習主体(井上, 2001)であることから、「文化の差」とどのように向き合っていくのかが、留学生の適応を予測する重要な要因の一つとして考えられる。これを測定する概念として、Berry(1990)の文化受容態度がある。この概念に関する研究の多くが、単純に文化受容の水準とメンタルヘルスの相関を見るだけに留まっているとの指摘があり(Shen・Takeuchi, 2001)、本研究では、他の要因として、原因帰属とコーピング方略に焦点を当て、文化受容態度のより詳細な理解を目指す。

原因帰属 原因帰属は人間が環境の中の事象を理解し、説明しようとする過程の基本であり(外山, 1988)、留学生にとって、異文化を理解する一つの手段であり、彼らの異文化理解や適応に重要な認知的過程であると考えられる。異文化に対してどのような認識をしているかが、留学生の原因帰属の方法に影響を与えていると考えられる。

コーピング方略 留学生は新しい環境への移行に伴い、日々様々なストレスに曝される。これらにどのような対処をするかが留学生の適応に重要な要素であると考えられる。先行研究より、

問題に対して「ストレス状況を変化させる」、「相手文化を取り入れる」など、積極的に対処するコーピング方略が適応を促進することが明らかとなっている(Crockettら, 2007など)。また、コーピング選択には、パーソナリティや態度といった個人差が影響するとされている(上淵ら, 2014)ことから、留学生の異文化に対する態度の個人差が、コーピング方略の選択に影響を与えていることが推察される。

以上のことから、留学生の文化受容態度は、原因帰属やコーピング方略に影響を与えていると推察される。従って、本研究では、これらの関連を検討し、文化受容態度の心理的特徴についてより詳細に理解することを目的とする。

仮説

仮説1 自国文化と相手文化の統合度が低い者は、高い者に比べて、留学先で生じた問題の原因を、相手国の人々や文化の習慣といった「文化的要素」に帰属する傾向が高いだろう。

仮説2 自国文化と相手文化の統合度が高い者は、低い者に比べて、留学生にとって適応促進的なコーピング方略を使う程度が高いだろう。

方法

研究協力者 中国語を母国語とする在日留学生

調査日時 2014年9月～12月初旬

手続き 他大学や知人に協力を依頼し、郵送にて33名分を回収。Web上の質問紙では、68名分のデータを回収。最終的に80名分のデータを対象とした。

質問紙の構成 ①フェイス項目 年齢、性別、出身国、所属学部・学科、滞在期間・滞在予定期間、日本語能力、アルバイトの有無の記入を求め

た。②文化受容態度尺度28項目。③留学ストレス尺度15項目。④原因帰属尺度24項目。⑤コーピング尺度 21項目。⑥日本語版GHQ精神的健康調査票12項目。

なお、質問紙はすべて中国語で作成した。

結果と考察

基礎分析 各尺度の因子分析を行った。留学ストレス尺度では、「異文化理解困難ストレス($\alpha=.76$)」、「学習・研究ストレス($\alpha=.73$)」、「対人関係ストレス($\alpha=.65$)」。GHQ-12は、「自信のなさ($\alpha=.85$)」、「無気力さ($\alpha=.67$)」。原因帰属尺度は学習・研究領域において「文化・外的要因($\alpha=.80$)」、「自己能力($\alpha=.78$)」対人関係領域「文化的要因($\alpha=.82$)」、「自己能力($\alpha=.84$)」、「外的要因($\alpha=.68$)」。日常生活領域において、「文化的要因($\alpha=.75$)」、「自己能力($\alpha=.91$)」、「外的要因($\alpha=.68$)」。コーピング尺度では、「積極的対処行動($\alpha=.78$)」、「ポジティブ思考($\alpha=.81$)」、「異文化順応行動($\alpha=.67$)」。全16因子である。

文化受容態度の類型化 自国文化と相手文化のどちらもほどよく受け入れようとする『融合群』、両文化を受け入れようとするが、特に相手文化を重視する『相手文化優位群』、両文化に対して矛盾した態度を持ち、文化アイデンティティが拡散している『拡散群』の3類型が抽出された。

仮説1の検証 『拡散群』は、問題や困難の原因を、『融合群』や『相手文化優位群』に比べて、より文化的な要因に帰属しやすいという結果が示された。相手文化と自国文化の統合度が低い者は、高い者に比べて、文化的要素に帰属する傾向が高いことが明らかとなった。従って、仮説1は支持された。『拡散群』は、問題を文化的な要因、或いは日本文化批判的に解釈する傾向が強く、相手文化に対する偏見を持ちやすい認知的特徴を有していると考えられる。このような傾向が、異文化交流や両文化の統合を阻害する要因となる可能性が推察された。

仮説2の検証 『融合群』と『相手文化優位群』

は、「積極的対処行動」、「ポジティブ思考」を使用する程度が『拡散群』に比べ、高いと示され、「異文化適応行動」においては、差が見られなかった。自国文化と相手文化の統合度が高い者は、低い者に比べて、適応促進的なコーピングを使う程度が高いという仮説において、「積極的対処行動」、「ポジティブ思考」においては支持されたが、「異文化順応行動」においては支持されなかった。『拡散群』は、他の2群に比べ、相手文化との接触欲求が低いと考えられ、ソーシャル・スキルや、ソーシャル・サポートなどを獲得しにくく、積極的対処のためのリソースが相対的に少ないことが推察された。

文化受容態度とアルバイトの関連 アルバイト経験が、留學生にとって、日本に対する拒否的な態度を形成する可能性が示唆された。アルバイト経験により、日本文化により密接した留學生生活を送る中で遭遇した肯定的・否定的経験が、留學生の文化受容態度の形成に繋がっていることが推察される。『拡散群』は、アルバイト先で何らかの否定的な経験によって、相手文化に対して嫌悪感を抱いたり、或いは自分自身を振り返る中で、自国の習慣を批判的に捉えることに繋がり、どちらの文化にも価値を置くことが難しい状態になっていると考えられる。

臨床心理学的意義

文化受容態度を留学先の精神的健康だけでなく、原因帰属やコーピング方略の観点から捉えるという視点が加わった。これにより、留學生の文化受容態度について、滞在先での問題に対する解釈のパターンや、対処方法の視点を加えることで、より詳細なアセスメントが可能になると考えられる。また、カウンセリング場面において、アルバイト経験について丁寧に扱うことで、留學生の文化受容の側面からの心理的支援が可能となるだろう。